熊谷蓮生一代記

三

L289
7

慶應二年
寅十一月求之
梅作郷岩川村
新谷伴六

埼玉県立浦和図書館
8411731
蔵書

熊谷蓮生一代記巻之三

目録

熊谷父子勇を揮ふ事
并ニ 平山武者所高名之事
九郎義経一谷逆落之事
并ニ 平家西海の浪ニ漂ふ事
熊谷直実大夫敦盛を討發心起之事
并ニ 敦盛遺言母衣の名號之事
熊谷軍中に竊願之事
并ニ 義経直実が忠義を感玉ふ事

熊谷蓮生一代記巻之三

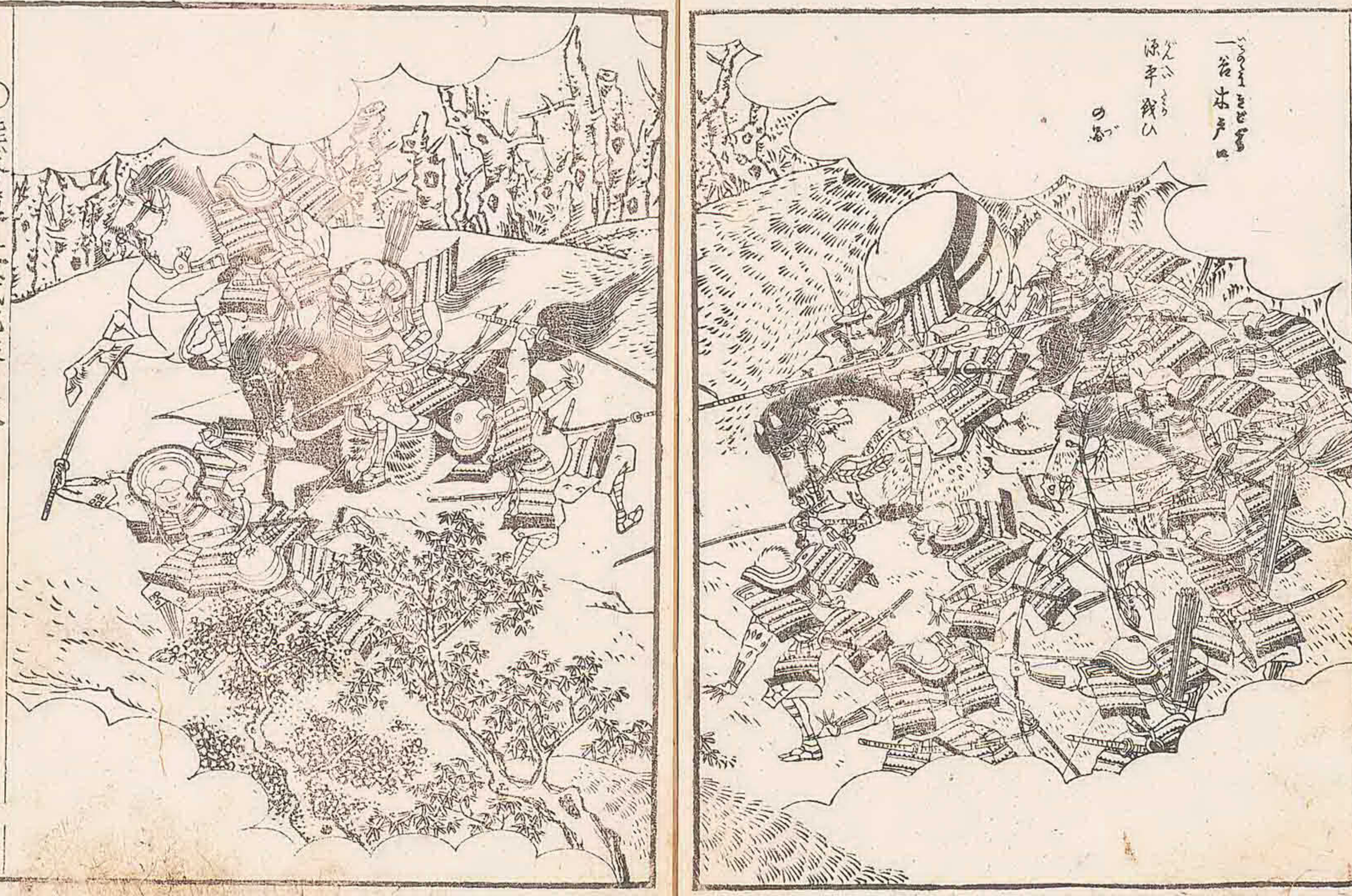
熊谷父子勇を揮事
并ニ平山武者所高名之事

合會須臾に散じ。栄貴久しく常なし。華厳経に見へたる至。凡人間の化なる事を案ずるに生ある者ハ必死に帰し盛なる者ハ終に衰るの基也。されど平家世を知て二十余年。唯一瞬の夢のごとし。治承の春の花も寿永の秋乃嵐に誘ハれて散ゞとなる磯枕。西海の浪荒く。一葉の舩の波のごとく漂ふ。抑一の谷の城郭ニハ平家恩顧の武士。南海九州乃英雄塁壁を築て待懸たり。夜もやゝほのぐと明ゆけバ。城中より寄手をうかゞへるに。唯武者二騎にハ過ざりけり。平家の武士嘲

笑ひ。源氏の勢の二三千もあるべしとおもひしに。敵のうちより高声に名のりたる熊谷父子とても只二騎なり。虜にして御大将宗盛卿の御意なり。わつといふや城門をひらけしが。賊こそあれ。平家の御内に一騎當千とよばれたる越中次郎兵衛盛嗣。上総五郎兵衛忠光。飛騨三郎左衛門景経。後藤内定綱。悪七兵衛景清を先として猛者二十三騎。熊谷父子を的にして。木戸開きて切て出。ゑいと喚て蒐立れ。熊谷少しも臆する色なく。親子先を争ふて戦ける。敵は二十三騎なり。さらでも雷とおどろくべきをあなどつてくみあふをなぎたふし討とりけり。一さんに武蔵国住人平山武者所季重[illegible]五騎なりけり。城門へ請入れば。平家の軍勢又これを遮るんとする其隙に熊谷城中へ請入ければ。高櫓より見おろして。敵は唯二騎なり。組や者どもと下知をなしけれど。熊谷ともに逸物の名ある者なれば。勇士あまたるごとく。唯電光の雲中に入るごとく綱をさらへて請まゐれば。二十三騎は兵ども平山を囲んで。熊谷後より追崩し。平山無二無三に切て廻る。又櫓より是を見て平山を組で。それ熊谷を虜にせよと聲々にぞ呼りける。あら人疾雷のごとく走よせてせめつけど。平家の軍勢数組んと数百騎一度に討てかゝれど。熊谷平山爰を先途と討はらひせんと無益なりとて。城門の外へ出て暫く休らひ居て。ゐく。越中次郎兵衛盛次よき敵ぞいつて組んと。紺村

の直垂に萌黄縅の鎧を着し白星乃甲葦毛の馬にまたて乗りかゝりしが。熊谷に組んと進み寄る。直家は父に組ば落合ん。直実は子に組で落合んと互ひに四方へ眼をくばり油断を見すまし暫次をも手取にせんと窺ひ。次郎景清おし寄てやありけん。一陣だちり引退て。源家の大将はて我組合て命とも捨高名とも鄙へとくべし。和殿ばらの敵武者ども組合ずし。深引に引わかるゝと。熊谷怒つて源氏の敵武者の手並をみてしと逃るゝまで。景清かしこよりあらはれ出。熊谷が廣言をきゝ引かへし来る。熊谷父子は景清を中にとりこめ渡す勝負も極らんとする所と成之次なりけ。景清己の君の御大事ハとゝふに限べらう

もて。無益に命を捨るへからずと制せられしぞ景清実に尤と刀を切ゐけて引しりぞく。其外平家の軍兵ほどなく討れしども。誰ありて出合者もなく。只矢をそろへ雨のごとく射るぞけるぞ。直實が乗たる馬乃太腹を射させ。頻りに跳上りければ。足を越て手綱を携のよろりと見えて鐙踏張馬上の働きこれを叶しけれとも。ゐると驚きてハ鐙介乃水を離つくみえしぞ。組やられと討るとも。誰ありて落合者もなかりしに。小次郎直家父のあやうきとみるよりも今は最期と思ひ切て。一の城戸まてかけよせ。熊谷小次郎直家今年十六歳組合勝負は今日が手始。我と思はん人者あらば組やくし。名のりかけて攻かゝれども今ハ落合者



一谷木戸口源平戦ひの圖

もなく。喉射て取と散々に射ける矢に直家が手指を射られ血ハながるゝに傳ひて足へながれけれバ。直実是をみるよりも打すて介抱すれども。小次郎父に向ひ。何条是程の手疵にまふなとて振捨て群がる中へ駈入る。平山ハ勢ひ続せてなかにも是を絶せじが。重家を以て是を取ぬよふえてけれバ。父を助んと入替りて戦ふたり。平山が旗指黒革縅の鎧に三枚兜を着たりけるが。馬より下り討落され忽ち討死しけるを平山安からず思ひ。旗指を討たる敵に押ならんでむづと組。馬よりまて首かれて左方先へつゝぬき。一騎當千の兵と平山が一方に討れたり。敵ともいへる者あらざれど。組やれまで夜だけりて城の外へぞ出ける甚だ目覚しくも又いさぎよし

九郎義経一の谷逆落之事
并ニ平家西海の浪に漂ふ事

同七日の曉に九郎御曹子義経鷲尾三郎義久を案内者として一の谷の後なる巌石落の山をすぎ鵯越にうち立て暗夜の所に打伏鉄楯が峯に登りて城中をみおろせば屏風を立るごとし。前ハ渺々として河海後ハ山も高くわたり。右ハ明石左ハ須磨生田の森越て見おろせバ。軍ハ今ぞ半とみへて喚き叫ぶ鯨波や峰の嵐天地を動かし。赤白の旗朝嵐に打靡き。そのありさま劫火地を焼らんも斯やと見えてすさまじく。九郎判官義経ハ太夫黒といふ名馬に打乗。諸軍を勧

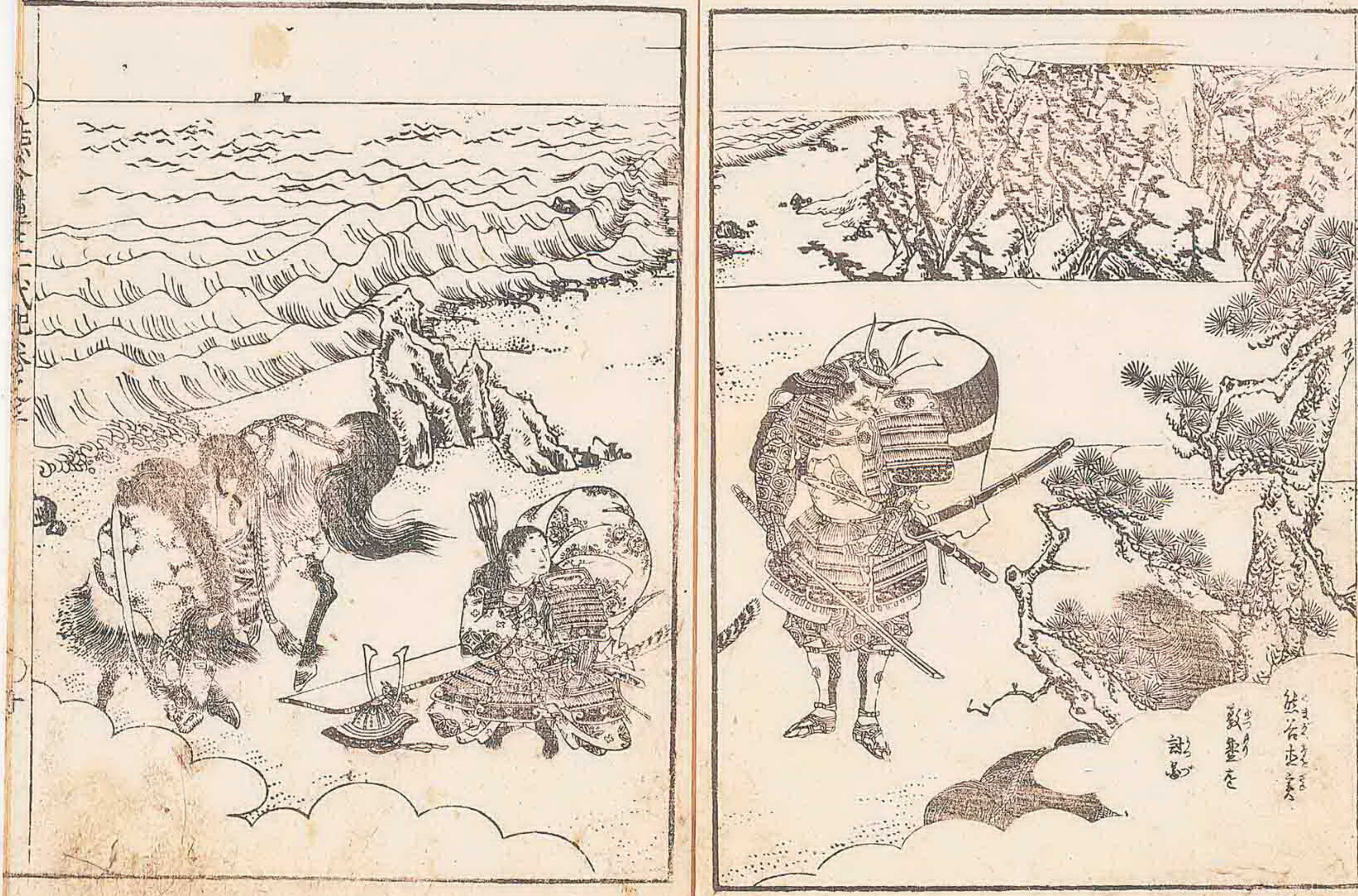
まし。のくまのハ總じてか様なる嶮岨を落すよハ四ッの大事といふ事あり。一ッにハ心二ッにハ手綱三ッにハ鞦四ッにハ鐙とぞ。然ども所詮ハ一心なり。義経が乗れ立招を吾殿原ハ手本に為よと。真逆に引向て手綱かいくり鞍を手り。鐙を蹈て落し強く鞭に續けやとて白旗三十流。連峯より飄し。轡を並べて手綱かいくり尻足踏せ勢ひに乗て逆落に落しなる也。万仞千重の牆壁も一さんに請落せしが。爰に崔嵬たる大巌あり是より底ハ二十丈も有らんと見えて岩石塁々として落べき便も見えず。諸軍もあきれ固唾を呑で猶豫なるが。爰に三浦党の中より佐原十郎義連といふ者。進み出て。我ハ甲斐信濃深山へ猟に出る時ハ峨々たる巌石も鹿より先に乱獵く追まくる事ハ毎々の事なり。いざや先陣仕らんと鷲尾に案内させ。先に進んで驀落せバ義連を討する續けやとて。皆一同にぞ落しける。畠山の次郎重忠ハ。三日月と云名馬を手綱と腹帯をとり合せ。常にハ汝にかゝる又今かゝる時ハ労らんと鐙の上に擔負て巌の角を乱獵くおりけれバ。関八州の大力とハうちまく算しけるも。峰今ハ振舞ハ人間業とハ見えずと諸軍肝を消けるそれより續て三千餘騎。多く蹄を出で巌頭を落せしハ。正八幡宮の御加護にてやありけん。人馬も損ぜず。三十流の白籏押立一の谷の城郭に鯨波とぞ挙たり。平家方にハ東西の城門てを堅め方を守りしも堅く鉄壁が軍より。敵兵落すべしとハ夢にも

さしも大山の一度に崩れ。湧水涌いづるがごとく。城中大に狼狽さわぎ。一陣の軍兵を互に引合。撃けるほどに敵討て在陣丸陣に騒乱す。其時義経下知し玉へバ。這ては営や仕寄りたん乾きたる芦萱束に焔硝を添てぞ。火を放ち焼ければ。折から西風烈しく。猛火城を覆ひ黒烟四方にみちくたるに。平家の軍兵今は敵を防ぐ者一人もなく。我もくと急逃をさして落て行く。海の浦にハ多くの軍船繋ありければ。将士雑兵の分崩して乱入く。一艘の船に数百人乗込みれバ其儘に沈むもあり。又ハ纜の人数とのせて漕がゆゑに沈むもあり。騒ぐありて。安徳天皇。建礼門院。二位殿大臣殿をなしけるが奥に乗まつりて。右大の敵を退拂く。御座船にのせ奉りて。讃州八嶋の浦へ落玉ひける。此時平家方の薩摩守忠度。但馬守経政を始め。其外多くの軍兵亡ぶる者数を知らず。無慙といふもおろかなり

熊谷直實大夫敦盛を討発心起し事
并ニ敦盛遺言母衣名号し事

去程に平家の籠りし一の谷の城郭忽ち敗れしかバ。残党全からずして先を争ひ。軍勢一度に崩れて兵船に乗らんとす。源氏の勢ハ勝に乗て責付く。戦ひけるに船に乗こと叶はず。浪打際にて討死し。或ハ生捕るゝ者もあり多く討れさし哀れなりしハ。太政大臣入道清盛公の舎弟修理大夫経盛卿の三男無官大夫敦盛ハ。新中納言の乗玉ひし船を目がけ

紺錦の直垂に萌黄匂ひの鎧を着し白星の兜重藤の弓に十八さしたる矢を負ひ鴾毛の馬に打乗て渚の方へ歩まひ。海上をさすがりも游せ来る所に直実是能敵さん引組で高名を顕さんと汀をつたひ八方に眼を配りける正しく見るより声をかけ。平家の御大将と見へし。錦の汚なくも敵に後を見せ海に趣し玉ふぞ。某ハ源氏に名も隠なき武蔵の住人熊谷次郎直実なるぞ返させ玉へ勝負せんと大音上て日の丸の扇を開き招しくば。敦盛ハ敵よ声を懸られて。左右なく打練の口をべきと思ふに引返し。渚の方へ游がせ足を揃るもなりしかば弓を海へ投捨て。太刀を真甲に抜かざし。熊谷と見かけて近よりたまふ。心の内こそ優しけれ。待設けたる直実ハ是れ究竟よ手綱をさしのべて馬と馬とを駢べ。二打三打戦ひしが。軈て其侭引組で渚よどうと落。敦盛卿ハいまだ柔弱の公達なり。熊谷ハ力量勝れし古兵なれバ苦もなく下に組ふせ鎧の袖草摺ともに膝にてむづと押へたまへバ。敦盛少しも働き玉ハず。已に頸を掻んと腰刀抜出し。兜の真甲引仰け。内冑をきつと見けるに年の頃十六七計なる。上臈の化粧よ鉄漿黒々と細眉あなかち今の乱軍にも芙蓉の鬢づら見えすかね麗。やんごとなしおとくしとみへけるに。直実忽ち剛気もぬけてあら無慚や是。わが子の小次郎がいかなる天魔が生れしぞかれどましまして



熊谷直実（くまがへなをざね）
敦盛（あつもり）を
討図（うつづ）

一色君達ハいづくに浦れ恐るべき。平家方にハいづれの公達にてましますならん。名乗せ玉へと申けれバ。敦盛卿いやとよ名乗て一門の恥を遺さんより。早く討まして。詞鮮にのたまへバ。熊谷ハ涙にむせび。誠に栴檀ハ二葉より芳しく。天晴大将の器量や潔したのもしく。親に劣らぬきの吾妻の果の荒夷に名乗て何させんと思召も我こそも主君の命をうけて手向ひし事なれバ包まず名乗せ玉ふべしと。事を分て申けれバ。其時敦盛たゞく名乗ハなのらずとも遁るべき命ならねど。名をば惜て軍功の誉と望ならん。其方が手に懸るも先の世の因縁。餞をたゞ恩して報ずる例もありぞかし。名乗てきかすべし。我こそ

故平相国入道の弟修理大夫参議経盛の三男無官の大夫敦盛とハ我事なり。今年十六歳なる初陣の戦く斯傾きし平家の運命。疾く首を討ましと宣へバ。熊谷ハ名を聞よりも落る涙ハ止ましめがし。惜しや惜ましや我子ハ小次郎直家と同じ年にておはすなり。焼野の雉子夜の鶴子を思ハぬハなけれども。増て先ほどいつくしき若君を討参らする情なき武士の身となりしこそ。君命といひかゝるあらたなき世の理と紅涙絞の袖をぬらしきが定めて父母も悶へ焦玉ふべし。殊に我子と同年にてましませバ痛ましさよ。又平家の中に於ても剛勇の人なるぞ。首取て功名ほまれも知らるべき。斯やんちうと

なき上﨟を手にかくるとも手柄なれバいざ来て助けよかしせ。沖の船に乗せんと呼ひ立あがり。四方を急度眺むれど前後に満る味方の軍勢。中にも平山成田の兵卒に引返盛てを討とらんと甚だ争ひ。若手に助けまゐらすとも定めて名もある雑兵の手に懸り玉はんも無念なり。然ばとて一旦組敷たる敵将を助けしハ。二心ありといはれんも無名なるべし実に助けしなすとも御殿の通此汀まで源氏の勢充満せり。迚も遁れ玉ふべき御身ならねバ。いさぎよく御首とらるべし。直実弓矢にかけて殺害し御菩提を問奉せん。かゝれバ草葉の陰にて御殿ゆるし玉へと首を押へてかきくらげど。いや/\熊谷一旦敵に組ながら何面目に存命へ

き後れてゐるが。いと易く討とし涙しに咽へだ。直実是を力なくて。堰くる涙をとゞめ。口に仏号を唱へ終るを首討ふなる頓て首を母衣に包んで鎧の直垂を剥てみれバ。錦の袋に入たる笛を腰にさゝれける。熊谷是をみるよりも。あないとほしやな。此暁に城内にて音楽を調玉ひつるハ此人にてぞありけるか。優の公達やとて又もや袖をぞ絞りける。即御首横笛をも直垂とつゝミ。我母衣の中に隠し。其死骸とバ泥底に曝さんもいとおしと。浪間に押隠し。帰る所へ子息小次郎直家父に離れて尋ひしが。漸平家を追ちらし来逢けるにて。討方と見まだ。直実同じく御首をさゝげ捧げみせてハ参議経盛卿乃御子の大夫敦盛にて候と

同年にして優に艶き公達なるをバ助けまゐらせんとおもへども前後に満たる味方の軍勢若二心ありと疑れんも口おしく無慙ながらも討奉りし悲しさよ。たゞ忠実世にならぶ後の末までも必菩提を弔ひ奉りすべしと。涙と共に語りければ直家も為方なかりし。涙の袖をしぼりける。扨てこそ後に熊谷が蓮生法師と發心の根ざしハこゝとしるべきなり

評曰　敦盛の首を包まれし母衣絹ハ父経盛都に在せし時。吉水上人の庵に至りまり。我武門の勤なれバ。義戦に於て何時命を果さんも知ざりけれバ後世菩提のため。此絹に経文を書てたまハれかしと願ひまゐらせしが。それが絹を標し て名号を四十八遍認めくだされしかバ。蓮生法師其初まで肌身を放さずおはりしと。今京都熊谷山法然寺の什宝となる。その熊谷が[illegible]あり

熊谷が母衣絹の名号并に小枝の笛等摂州須磨の浦福祥寺に宝物とす。法書に敦盛此討死ハ十六歳と記せり。ある家の書に十八歳とありしハ是ならむ歟

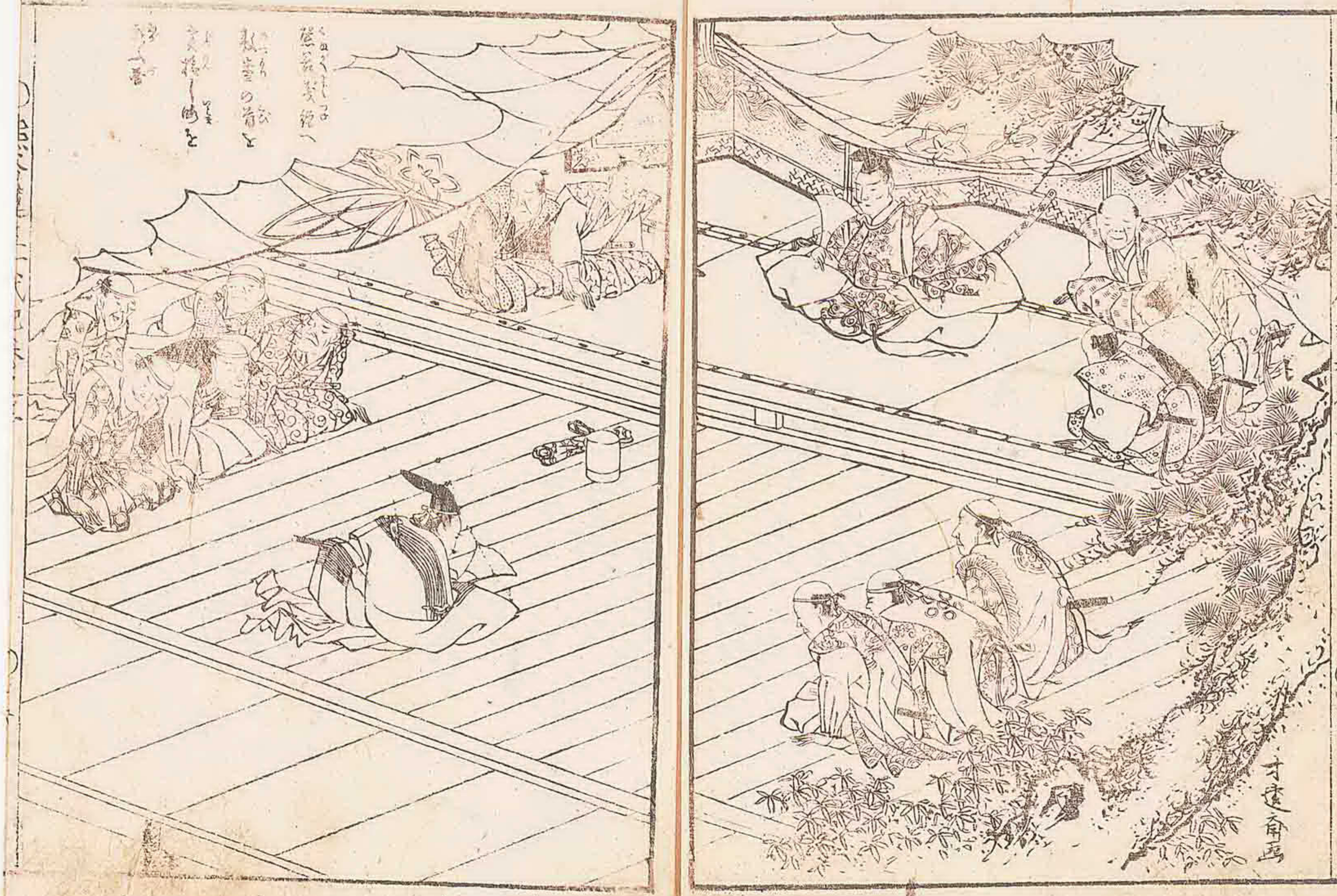
熊谷軍中に暇願之事

并ニ義經直實が忠義を感じ給ふ事

夫より[illegible]陣所に帰るも義經公御前に参り敦盛の首を。実検に備ぬ。義經熟と見給ひ直實ハ文[illegible]の合戦より。今日此戦ひ稀鮮の高名あり。[illegible]直實へハ源氏へ手入を退て義經付らるべし。其外望あらバ言ハ無用たるべし。又小次郎直家ハ矢疵を負れしが大切なる労るべし。疵平癒までハ。いかなる義あるとても。かまへて出るまじ及ざれと仰有けれバ。直實謹て承り御前をさがり直實

願あり。敦盛の御首今日ハ見参に下されなバ我に預りてすぐさま尚文より御館を給り帰国御免下さバ宜し又悴直家が義ハ御用に立べき若者なれども何国までも御供に召つれられ下されなバ生々世々の御厚恩なりと願ひけれバ。義経公聞せ玉ひ敦盛の首ハ軍門にかくべき義経が私のはからひに成がたし。然れども其子細ハ何成と仰ありて。直実謹で首をあげて其子細ハ某幼少の時父直貞若くして忠盛のために害せられしも其時に害せらるべきを北脇敦盛の父経盛の為に助命に預る大恩あり。しかるに今其恩に報ずるに義経を討する事。恩を仇にて報ずるがごとし。

助けて討せんとハ。不忠二心の疑ひを得んことを退て追孝いたしせしうへハ是非なく討れしごとく是に依て敦盛の首申うけて父の経盛に送り参らせ直実が所存をも申入恩がへし謝恩の端となるか。左なくば畜類同前におもはれんず。直実生て何かせん。せひく御願かなハずんバ。生害仕るより外なしと。思ひこんで申けるに。義経大に感じ玉ひ願の如く聞届けり。私のはからひ後日に難に及ぶとも。義経すべし。後悔なし。首ハ勿論遺物までも小次郎が所存に任せし。天晴直実忠臣義士の道にかなへりとぞ褒られ。暇を乞て帰国の願ひ甚ゞ入レて叶はず。しかるの合戦味方に勝利あるといへども軍ハいまだ半なり。暇



[illegible]殿へ
[illegible]の肴と
[illegible]首を
献ずる図

機應變ハ軍陣の常なり。敵と合戦して雌雄を決せんや。此義をしらざる直實にもあらじ。何ぞ暁らざらん。但し義經が軍配は殿がゝりなからずや。将としてハ士卒の忠なるを見ずして短慮に及ばずして行はるれバ。直實ハ大逆に平伏し。こハ勿体なき御諚かな。聡明三徳の名あれハ下知に於て一言の子細なし。某が言葉の趣さへ今ぞ御述にハ申まじ。後日恩禄に募せば。御しめし下さるべし。殊又去壽永元年六月熊谷郷の旧領直光が押領を停止せしめられて領掌あるべき旨御下文を頂戴して嬉さを別るにつき。淨海の義ありて今に是を決せん。此度の出陣なりとも。此の義と一室して御供となせしが。器用の者なれ時よ讓り

洞ん事を憚りありとて。押て出陣せり。君それより戦場にて討死せバ此義決すべきよろしく御暇と下されなバ早速歸國仕り。鎌倉へ趣く義を途中さんと委細に述られで。義經をうち見れバ泪が目に語さらさく述らしとハ恩愛ある事に此へられ。殊更軍務りて後義經が面に及ぶまでハかなしく卒等し義なるべくとぞ利欲の事海の事ハ大切の義なり。身命に於て領せしとも事まかせざるハ忠義の無縁の子孫まで乃暇護なるのそこにまかせ暁ねども。べし。又小次郎事宗の内川の軍功万人に勝まて賞ずるにあまりわれ今日乃軍に痛手を負しといへども。諸人是を賞せざるなり

滅ぼ盛人のほハ道も鎌倉殿乃御用ふもたつべき器量なり。委細ハ宜しく頼朝卿へ申ますべし。平家も痛く源家のさか。父子同道して帰国致すべしと。陣営を出りけれバ直實も諸軍にお面目ありて頓て出家とぞなりけり

評ニ曰義経ハ直実を讒人のことばに。忠臣義士の為にも叶ハずとある。目出度道ふもかなふべきなり。其志し滅あらざるや。敦盛を討ける恩ふも義にも背けども理を考へ却て道にかなふ也。初めに命をたすけんと心をつくせしハ。親恩といふ也。助けても敦盛も人にかかり直実もいのちを捨未代に悪名とならん。又あつもり一人助けても平家の一門のこらず死する日。たゞ一人おゐて助けるも一たんの慈悲て縁きハ後日にあり。もし助けて敦盛ハ器量ありて云ふべき平家ほろびずんバ。源氏への不忠なり。誠ハ討て源氏へ忠臣且ハあはれ愍父子も直実がなさけを感じたれ共討るが秘惰なく。經盛の怨心せしもし。敦盛死して直実がなさけ此顔を見しも思ひなり尤親恩ともいふべし。いのちに報てあつもり此首をさらけるゆへむまことなり。忠臣義士の道にかなへる深き味ふべき事多し

熊谷蓮生一代記巻之三終